

理性による意味の基礎づけ

グライスにおける意味

三木那由他*

1. はじめに

グライス哲学には二つの大きな柱がある。意味の分析と含みの理論だ。これらは基本的に個々の会話場面における話者の意図、および聞き手による話者の意図の解釈といったものに基づいている。その結果、グライスの枠組みにおいて意味の客観性がどのように保証されているのかは、一見したところ定かではない。だが、グライスがこうした意図解釈を理性によって基礎づけようとしていることを考慮したなら、この問題を解消することができる。本稿ではこのことを論じる。

議論の方針を記しておくのがいいだろう。まず含みの理論について振り返る(2節)。次いでグライスによる意味の分析の内容を見る(3節)。この節の終わりでは、話者の意図という概念に即して、意味の分析と含みの理論の関係について暫定的な説明を試みる。最後に、これら二つの流れを踏まえた上で、意味という現象全体の基礎が、グライスにおいては理性の能力に求められることを確かめる(4節)。それにより、意味の客観性をグライスがどのように保証しようのかが明らかになる。

2. 含みの理論

含みの理論への接近としては、具体例を見るのが手っ取り早い。例えば、「ガソリンが切れた」と言うAに対し、Bが「角にガソリンスタンドがある」と応じたとしよう。これが含みの生じる典型的な場面だとグライスは言う(Grice, 1975, p. 32)。この会話において、Bは文字通りには角にガソリンスタンドがあると言っているにすぎない。だが、Bが伝えているのはそれだけではなく、そのガソリンスタンドが開いているということや、そこにガソリンがあるということも伝えられているものと考えられる。こうした文字通りの内容を超えた言外の伝達内容を、グライスは「含み(implicature)」と呼んでいる⁽¹⁾。

含みの理論の眼目は、会話の含みという現象を一般的に扱う枠組みを提供することにある。その枠組みの中心にあるのが「協調原理(Cooperative Principle)」だ。協調原理は「発言を行なう際には、それが現れる段階において、自分の従事する会話の目的や方向性が求めるような発言をせよ」(Grice, 1975, p. 26)と定式化されている。この協調原理の下には、量(必要十分な情報量の発言をせよ)、質(真なる発言をせよ)

関係（関係のある発言をせよ）、様態（明瞭たれ）の四つの格率があり、これらに従うことが結果的に協調原理を守ることになるとされる (Grice, 1975, pp. 26-27)。

一見して明らかのように、これらの格率は実際の会話ではしばしば破られる。そうした場合でも、話者はふつつ協調原理は守っているものと想定される。このようなずれが含みを生じさせる、というのがグライスの発想だ。実際、グライスの提案は、「(1) 協調原理とそれに従属するいくつかの格率を、会話の参加者は標準的に（常にではないが）守って」おり、「(2) 言われていることのレベルで—それが無理ならば含みのレベルで—それらが（可能な限り）守られているという想定を維持するのに必要となる仮定は、会話的なタイプの非慣習的含みと体系的に対応する」(Grice, 1978, p. 41) というものだった。

例えば先の B の発言は、一見したところ量の格率を破っている。というのも、B はガソリンを求めている A に対し必要なだけの情報を与えず、ただ角にガソリンスタンドがあると言っているだけだからだ。だが、B は協調原理を守ってはいるはずだ。このとき、B が協調原理を守っているという想定を維持しつつ、B が情報の足りない発言をしているという事実を説明するには、ガソリンスタンドが開いていて、そこにガソリンがあるということを B が含みとしていると考えるしかない。つまり B は表向きは量の格率を破りながら、含みにおいて格率を、それゆえ協調原理を守っているのだ。

こうしたグライスの含みの理論は、意味理解のプロセスを記述するものとして捉えられる。聞き手が発話文の字義的な意味をもとにして、どのように言外の含みを理解するのか、そのありようをこの理論は描いているのだ。

この節では、含みの理論の内容を確認し、それが意味理解プロセスの記述を与えるということを見てきた。含みの理論自体は決して難解なものではない。しかし協調原理の立場や含みの計算といったものを正確に理解するには、グライス哲学のほかの側面に踏み込まなければならない。だがそうした事柄に入り込む前に、グライス哲学のもう一つの柱、意味の分析に話を移そう。

3. 意味の分析

Grice (1957) 以来、グライスは意味の分析というテーマを繰り返し扱ってきた (Grice, 1968, 1969, 1982)。この節では、その分析の具体的な内容を確認しよう。

3.1 方法論

グライスが用いるのは、いわゆる「日常言語学派」の方法だ。つまりある概念を分析したければ、その概念に関わる語がどのように用いられているのかを見ればいいと

いうものだ。より具体的には、そうした語が適切に用いられる条件を特定することで、問題の概念の分析が得られるとされる。Grice (1958) は原因という具体例を使ってこの方法を説明している。それによれば、原因 (cause) という概念を分析するには、「日常の会話において、あるものがほかの何かを引き起こす (causing) ... と述べようとするのはどのような状況かを考えることになる」(p. 172)。

この方法は晩年の Grice (1987a) においても、「正しい方角を向いていたように思われる」(p. 181) と述べられており、それがグライスの哲学者人生を貫く方法論であったことは間違いない。そして意味という概念についても、グライスはやはりこの流儀を守っている。意味 (meaning) という概念の分析では「意味する (mean)」という語の用いられ方が研究されることとなる。

3.2 自然的意味と非自然的意味

問題が「意味する」という語の適用範囲である以上、グライスはこの語が用いられるあらゆる事例を考察対象としなければならない。実際、グライスの分析は「その斑点は麻疹を意味する」(Grice, 1957, p. 213) という、一見すると瑣末とも思える例を取り上げることから始まる。

だが、いつまでもこうした広大な領域をさまよい歩いているわけではない。グライスは膨大な意味の事例の領域を大きく二つに切り分け、そのうち特に重要なほうにのみ着目するという方針を取る。こうした文脈で導入されるのが、「自然的意味 (natural meaning)」と「非自然的意味 (nonnatural meaning)」の区別だ。

自然的意味と非自然的意味を分ける基準はいくつかあるが、グライスが後に「事実性 (factivity)」(Grice, 1987b, p. 349) と名付ける特徴に着目するのがもっともわかりやすい。例えば、「その斑点は麻疹を意味する。だが実はこの患者は麻疹ではなかった」と言うのはおかしい。麻疹を意味する斑点が出ているのなら、患者は麻疹であるはずなのだ。それゆえ、この例における「意味する」は事実性を持つ。これは自然的意味の兆候だ。これに対し、「(バスの) あのと三度のベルは、バスが満員であるということの意味する」(Grice, 1957, p. 214) の場合、これに続けて「だが実はバスは満員ではなかった」と言うことにおかしいところはない。こちらの「意味する」は事実性を持たないのだ。これは非自然的意味のしるしである。直感的には、自然の因果関係に基づく意味の事例と何かしら人為的な意味の事例の区別だと考えればいい。

こうした区別を与えた上で、グライスは分析を非自然的意味に集中させる。言うまでもなく、言語やコミュニケーションといったテーマは非自然的意味に深く関わる。

3.3 非自然的意味の分類と定義

非自然的意味には、大きく二つの種類のものがある。「場面意味 (occasion meaning)」と「無時間的意味 (timeless meaning)」だ⁽²⁾。前者は典型的に「U (発話者) は x (発話タイプ) によって... ということの意味した」という形を取る。後者は「x は『...』ということの意味する」として表わされる。

例えば「パーマーはニクラウスを叩きのめした」(Grice, 1968, p. 119) という発話について考えてみよう。この発言は皮肉かもしれない。その場合、A は上の文の発話によって、パーマーがニクラウスにぼろ負けしたということの意味しうる (場面意味)。けれどこの場合でも、上の文が「パーマーがニクラウスにぼろ勝ちした」といったようなことを意味するというのは変わらない (無時間的意味)。この例からわかるように、場面意味というはある発話を用いて話者が伝えようとしている内容であるのに対し、無時間的意味は発話された表現自体が字義的に持つ内容を示す。

こうした区別を持ちだしたうえで、グライスは場面意味を無時間的意味の基礎に置くことを提案する。無時間的意味については、「人々がある発話タイプを用いて、ふつう個々の場面で意味すること」という仕方でも分析できるというのがグライスの考えだ (Grice, 1967, p. 138)。それゆえグライスは、まず場面意味の定義を与え、それをもとに無時間的意味を定義するということを目指す。

場面意味を定義するにあたって、グライスはすでに述べた分析方法を利用する。つまり、われわれが発話者について、彼が何かを意味していると述べるのはどのようなときかを調べるのだ。こうした分析の結果、次のような定義が見出される。

- 「U は x を発話することで何事かを意味した」
 =df. 「(∃A)(U は次のことを意図して x を発話した :
 (i) A が特定の反応 r を示すこと
 (ii) U が (i) を意図していると A が思うこと
 (iii) A が、(ii) を満たすことで (i) を満たすこと)」⁽³⁾ (Grice, 1969, p. 92)

グライスにならって、このとき U は「A に r を生じさせようと M 意図している」と略記することにする。左辺の表現が用いられるのは、右辺の表現が用いられるような状況であるというのがこの定義の見方だ。この定義自体に対する正当化や、さまざまな反例に対処するための定義修正などについては踏み込まないようにしよう⁽⁴⁾。

この定義に意味された内容の特定を加えたなら、場面意味の定義としては十分だ。

- 「U は x を発話することで * ψ p ということの意味した」
 =df. 「(∃A)(U は次のことを M 意図して x を発話した :

- (i) U が p ということを ψ していると A が思うこと
- (ii) ($*_{\psi}p$ の内容次第で、ある場合に限って) (i) を満たすことで、A 自身が p ということを ψ すること) (Grice, 1968, p. 123)

ただし、 ψ は態度を表わし、 $*_{\psi}$ は ψ に対応する叙法を表わす。対応するというのは、 ψ に代入されるのが信じるという態度であるときには $*_{\psi}$ は直説法を示す「 \uparrow 」を取り、意図するという態度の場合には命令法を示す「 $!$ 」を取るということだ。

このままではわかりにくいので、具体例を挙げておこう。あるひとが「窓を開ける」と発話することで窓を開けるべきだということを意味したという状況を考える。つまり、「U は『窓を開ける』を発話することで!窓を開ける(窓を開けるべきだ)ということの意味した」だ。この分析は次のように与えられることになる(基本的に命令文の場合には、条件(ii)が発動すると考えてほしい)。

「 $(\exists A)(U$ は次のことを M 意図して「窓を開ける」を発話した :

- (i) U が窓を開けるということ在意図していると A が思うこと
- (ii) (i) を満たすことで、A 自身が窓を開けるということ在意図すること)

内容の特定を含む場面意味の定義項は「 $(\exists A)(A$ が p ということを ψ^{\dagger} することを M 意図して、U は x を発話した)」と略される。以下ではわれわれもこれに従おう。

次に無時間的意味の定義に入る。無時間的意味には、コミュニティに流通しているもの(言語の意味など)と、個人方言におけるものとがあると考えられる(Grice, 1968, p. 119)。前者は後者から「帰納的に」(Grice, 1967, p. 138)定義される。それゆえ、個人方言での無時間的意味の定義が与えられたなら、必要な定義は出さそう。まずは場面意味を基礎に置くという先に述べた方針に従って、次のようになる⁽⁵⁾。

「U にとって、発話タイプ X は(意味のひとつとして)『 $*_{\psi}p$ 』を意味する」

=df. 「U は X のトークンを発話することで、個々の場面においてふつう $*_{\psi}p$ ということの意味する」

=df. 「 $(\exists A)(X$ のトークンを発話するとき、U はふつう A が p ということ を ψ^{\dagger} することを M 意図する)」

「ふつう...する」という表現は曖昧だ。そこでグライスは「手続き (procedure)」という概念を持ちだす(Grice, 1968, p. 126)⁽⁶⁾。

「U にとって、発話タイプ X は(意味のひとつとして)『 $*_{\psi}p$ 』を意味する」

=df. 「U は次の手続きをレパートリーに持っている : A が p ということ を ψ^{\dagger} するよう U が M 意図するなら、X のトークンを発話する」

さて、これにグライスはさらなる修正を加える。なぜなら、この定義において「M

意図は不要」(Grice, 1968, p. 125)だからだ。その理由を説明する。仮に A が p ということを ψ^{\dagger} するよう意図して、U が X のトークンを発話したとしよう。U は当然これが成功することを期待しているはずだ。だがそのためには、自分の用いる手続きを A は知っているのだと U が思っているのだから。そうでなければ、どうしてももとの意図が満たされることを期待できよう。そしてさらに、A がすでに U の手続きを知っているがゆえに、U の意図が満たされるということを、U は想定しているはずだ。ところがこれは M 意図を構成する意図そのものだ。つまり U は A が (手続きをすでに知っているがゆえに) 自分の意図に気付くことを意図しているのだし、またそれによって自分の意図が満たされることを意図しているのだ。それゆえこの場合、M 意図を定義に組み込まずとも、身につけた手続きを利用する個々の場面で U が何事かを場面意味しているということは保証される。こうした事情から、ただの意図があれば、わざわざ定義で M 意図に言及する必要はない。それゆえ、最終的に個人方言における無時間的意味は次のような定義を与えられる。

「U にとって、発話タイプ X は (意味のひとつとして) 『 $*_{\psi}p$ 』を意味する」
 =df. 「U は次の手続きをレパトリーに持っている : A が p ということ
 を ψ^{\dagger} するよう U が意図する (欲する) なら、X のトークンを発話する」
 (Grice, 1968, p. 126)

この定義があれば、「あるコミュニティの多くのひとがある手続きを身につけている」という仕方で、コミュニティ内の無時間的意味の定義も得られる⁽⁷⁾。

3.4 意味の分析の意義、そして含みの理論との暫定的な関連付け

非自然的意味の分析の右辺には常に話者の意図への言及があった。そして意味された内容は、意図の内容によって特定されていた。結局のところグライスの分析は、意味を知ることとは話者の意図を知ることであり、何かを意味することとは一定の意図を持って発話することだということを示している。この分析と含みの理論との関係を暫定的に述べておきたい。

非自然的意味には場面意味と無時間的意味があった。実際に個々の会話で理解すべきなのは、むしろ場面意味のほうだ。話者の発話を前にしたとき、その場面をどう理解するか。含みの理論はこの関連で持ち出されているのだと考えられよう。

含みの理論は発話表現の字義的な内容から、話者が実際に伝えようとしたことを計算する方法を記述したものだ。意味の分析で使われた語法に従うなら、無時間的意味を利用して場面意味を計算するということだ。無時間的意味はすでに成立している手続きに依存していた。それゆえ聞き手は話者の発話に無時間的意味を持つ発話タ

イブを検知した場合、その手続きに従って話者の意図を推測することができる。だが、その意図は必ずしも話者の意図を尽くしていないかもしれない。そうした場合に、そのギャップを埋める仕組み、それが含みの理論で述べられていた意味理解メカニズムなのだと考えることができる。

だが、ここで大きな疑念が生じる。それは、個人の私的な状態だと思われる意図というものと、あくまで公的な側面の強い意味というものをこのように結びつけることがそもそも許されるのか、というものだ。グライスの意味の分析は、さまざまな意味を不当に主観的なものにしてしまっているのではないか、それゆえ意味の客観性に対する懐疑的なスタンスを含みこんでいるのではないか。こうした疑問は、これまで述べてきたことからすれば、必ずしも的外れではあるまい。だが、グライスはこうした分析を提示しながらも、意味の客観性を保持しようとする。それがいかにして可能なのか、そのことを見るために、次節ではグライスにおける意図という概念の地位と、人間の理性の能力について論じる。

4. 哲学的心理学と理性

4.1 意図

グライスの哲学的心理学において、心理状態とは「ある生物がある種の物理状況にあることとその生物がある種の行動に従事することとのあいだの説明の架け橋を与える機能を持つものとして」(Grice, 1982, p. 284)考えられる。

具体例として挙げられているのは、チーズの前にいるある生物Cがチーズを食べるという状況だ(Grice, 1982, p. 284-6)。まず、「(VX)(VF)(VA)(対象Xが特徴Fを持ち、かつ近くにあり、またタイプFのものは活動Aに適していると生物Cが信じており、かつCがAすることを欲するならば、CはXについてAを行なうことを欲する)」という素朴心理学的法則があるとしよう⁽⁸⁾。また、「(VA)(生物Cが特定の対象XについてAすることを欲し、かつそれが何らかの仕方で妨げられていなければ、CはXについてAする)」という素朴心理学的法則も認めよう。この場合、対象がチーズであり、それが近くにあり、チーズは食べるのに適したものだという信念と、何かを食べたいという欲求をCに帰したなら、チーズを食べたというCの行動は説明できる。それゆえ、こうした一群の心理状態がCに与えられることとなる。要するにグライスの考える心理状態とは、実際の行動を結論とする一連の論証を成り立たせるのに必要な前提の一部として要請されるものなのだ。

意味の分析における意図についても同様に考えられなければならない。この場合、説明されるべき行動とは、発話にほかならない。つまり、ある発話行為があり、それ

が前節の定義で与えられたような意図を話者に帰することによって説明できるとき、かつそのときにのみ、意味という現象は成立するのだ。

こうしたグライスの心理観を踏まえたなら、前節で提示した疑念をいくらか払いのけることができる。グライスにとって、意図は決して主体の私的な状態のことではない。むしろそれは主体の行為を説明するという脈絡でのみ働く、機能主義的な客観性を持った概念なのだ。

とはいえこの考えにも、二つの反論がありうる。一つは、コミュニケーションの場面において、通常われわれはいちいち発話に対する論証の組み立てなど行っていないということだ。グライスの説が単なる机上の空論でないならば、この反論に対して何らかの応答をできるのでなければならない。もう一つは、論証能力は個人ごとに差があるかもしれないというものだ。その場合、意味が個人ごとに相対的になるという可能性が生じてしまい、結局、意味の客観性は保持できない。こうした問題に対して、グライスは理性の能力を持ちだすことで解決を図っている。

4.2 理性

これまで漠然と「論証」としてきたものが、Grice (2001) では「理由づけ (reasoning)」と呼ばれている。そして、日常言語学派的な発想のもとで、グライスは「理由づけ」の能力こそ「理性 (reason)」だという仮説を採用し、「理由づける」という言葉が用いられる適切な条件を探求することで、理性の一般的な特性を探る (Grice, 2001, p. 5)。

グライスによれば、「理由づける」という言葉の用法にはある重要な特徴がある。それは、「誤った理由づけ (misreasoning)」や「不完全な理由づけ (incomplete reasoning)」も「理由づけ」と呼ばれうるということだ (Grice, 2001, p. 6, 8)。誤った理由づけとは、例えば「キャリアウーマンはみんなヘビースモーカーだ。君はヘビースモーカーだから、キャリアウーマンに違いない」(Grice, 2001, p. 6) のようなものだ。不完全な理由づけとは、「彼はイギリス人だから、彼は勇敢だろう」(Grice, 2001, p. 9) のような、前提（この場合は、「イギリス人は勇敢だ」のようなもの）が欠けた理由づけだ。これには前提が暗黙の了解となっている場合（口には出していないが、話者がこのような前提を想定してはいる場合）と、暗黙のものとしてさえ頭のない場合（理由づけ言明を提示した際には何も念頭においていない場合）とがあるが、いずれも適切に「理由づけ」と呼ばれる。

こうした観察から、ひとが一群の妥当な規則に従って理由を与えようとしているなら、それだけでその行為を理由づけと呼ぶには十分なのだという結論が導かれる (Grice, 2001, p. 16) ⁽⁹⁾。たとえ規則の適用を誤っていたとしても、また適切な前提を明示的

に述べていなかったとしても、ともかくも話者が妥当な規則に従って理由を与えようとしているならば、それだけで、その行為は「理由づけ」なのだ。

このような観察を踏まえ、妥当な理由づけをしようとする限りでのこうした理由づけの能力こそ、理性を持つ生物に一般的に備わった能力なのだとグライスは考える。すなわち、「理性を行使しようとするのが、この能力を行使する必要十分条件となる」(Grice, 2001, p. 33)。そして人間は理性的動物なのだから、この理性の能力を行使し、どんな人間でも一群の妥当な規則に従った理由づけをしようすることができる。それゆえ、すべての人間がそれに従おうとするような、一群の妥当な規則というものが存在することになる。

さて、こうした誰もが従おうとしている一群の規則が存在するなら、その規則に従った論証(理由づけ)は基本的に誰にでも到達しうるもの、あるいは到達することが望ましいという意味で特権的なものということになる。ここにおいて、先に問題となった論証の相対性というものは、解消される。確かに論証の上手さといった点では個人ごとに差があるかもしれない。けれど、上手な者も下手な者も一様に従おうとしているある論証形式があり、われわれはその形式に従った論証を個人の論証能力とは独立に正しいものとして考えることができる。

また、コミュニケーションの場面において、われわれが論証を行っていないという反論にもすでに対処できよう。確かに多くの場面で、われわれはほとんど論証といえないような不完全な論証を行なう。だが、不完全さはその論証が不適切であるという証拠にはならない。暗黙の前提を明示することによってにせよ、欠けている前提を事後的に構成することによってにせよ、その不完全な論証は、足りない部分が補われたなら正しい形式に従っているものになるよう目指されているはずなのだ。われわれは自覚的にはまったく論証をしていないような場合でも、求められたら論証を作れるような仕方理由づけを行なっている。これは意味の理解の場面においてもそうなのだ。

だが、この一群の規則なり形式なりといったものは、具体的には何なのだろうか。今度はそれが問われなければならない。

一つには、「形式論理によって与えられる…スタンダード」(Grice, 2001, p. 18)とされている。明言はされていないが、それに加えてすでに述べたような素朴心理学的法則も理由づけに利用されるものだと考えられているはずだ。これらがあったなら、一群の前提から結論を引き出すための規則はそろうだろう。

けれどこれで十分というわけではない。というのも、理由づけには理由を見出すというステップが含まれるからだ。論理規則と素朴心理学的法則によってなされるのは、すでに見出された理由を前提にして妥当な論証を組み立てるということにすぎない。

だがわれわれには、すでにある事態に対して妥当な理由を発見することも必要だ。つまり、不完全な前提を持つ論証に妥当な前提を追加するような推論というものが関わってくるのだ。これについても、誰もが従う一般的な形式があるのでなければならない。

ここでグライスがカントを持ち出す。具体的には「目的を欲する者はその手段を欲するという原理」(Grice, 2001, p. 94, 強調は筆者)だ。これが理性の能力に備わっていたなら、われわれは目指す一般形式を得られる。つまりこうした原理があったなら、われわれは目的を知っている生物の行動については、その目的に対する手段となるものを探すことで、その生物の行動を説明するための前提を見出すことができる。

4.3 意味と理性

理性と理由づけをめぐる議論を踏まえ、意味と含みの理論を捉え直してみよう。

先にも述べたとおり、具体的な会話の場面において聞き手に要求されるのは、話者が発話の場面で意味していることを理解するということだ。これはその発話行為の背後にある話者の意図を捉えるということにほかならなかった。

いまや「意図を捉える」ということの真意も明らかになっている。つまり、聞き手は話者の発話行為を結論とする一連の論証を(明示的にせよそうでないにせよ)組み立て、その適切な前件となる話者の意図を決定しようとする。場面意味の定義と合わせるなら、こうした論証を形成することこそが場面意味の把握そのものなのだ。

そのために聞き手はいくつかのステップを踏む。まず、話者の発話は何らかの発話タイプを用いたものである場合がありうる。このとき、聞き手は基本的にはその発話タイプの意味をすでに知っている。発話タイプの意味を知っているとは、その背後にある手続きを知っているということだった。ここでは、聞き手はいわば場面意味の場合とは逆向きの推論をすることになる。つまり、用いられている手続きを知っているとは、その発話タイプを用いた発話の背後に標準的にある意図をストレートに推測できるということなのだ。それゆえ聞き手は、発話タイプを検知したなら、それに関わる手続きの内容をもとにして、その発話タイプを用いた発話を通常は説明できるような(論証の前提としての)意図を即座に理解することができる。

ただ、この意図は必ずしも個別の場面における話者の発話行為を十分に説明しないかもしれない。ここで、含みの理論が関わってくる。

まず協調原理より、話者はふつう会話の目的に沿った発言を行なっているものと想定される。この会話の目的は聞き手も共有しているはずだ。そこで、カントの原理によって会話の目的を達成するのに不可欠な手段について、話者はそれを欲しているものと推測される。この時点で聞き手が仮定している話者の意図は、会話の目的を達成

するには何らかの点で不十分なものとなっている。この不十分さを補う意図を見出せたなら、それは会話の目的を達成するのに不可欠なものであるはずだから、カントの原理に従って、そうした意図を話者に帰することが許される。

含みの理論は、このような補完的な意図を見出すための、一種の発見法として捉えられる。現時点で仮定されている話者の意図がどのような点で不十分なのかを、会話の格率は示してくれる。すなわち、情報量が足りないのか、関係が薄いのか、といったことをだ。そして不十分な部分が明らかになったなら、それを補うような意図を話者に帰することで、話者の発話は説明可能になる（理由づけが与えられる）。こうした手続きを利用するのみではない、積極的な推測を伴って帰せられる意図こそ、先に「含み」と呼ばれていたものなのだ。

そしてもっとも重要なのは、この一連の論証（理由づけ）が理性の能力の行使として捉えうるということだ。すなわちこの節で述べた意図解釈の流れは、人間であるならば誰でも（どのような聞き手、及び話者自身にも）到達可能、もしくは到達することが望ましいような客観的な論証だと考えられる。この理性の能力の一般性ゆえに、われわれは通常、さまざまな発言の意味を同じように受け取ることができる。こうした仕方では、グライスは理性の能力によって意味の客観性を救うことができるのだ。

5. おわりに

グライスの含みの理論と意味の分析を振り返り、それらが記述する意味現象が理性に基礎づけられていることを見た。グライスの哲学においては、この理性による基礎づけによって、意味の客観性に保証が与えられているのだった。

本稿には直接、間接の二つの意義があるように思われる。直接的には、意味を意図によって分析するというグライスのプログラムが、決して意味の客観性を損なうようなものではないということが明らかになった。これにより、グライス哲学の正当性をいくらか増すことができよう。

そして間接的には、意味の研究における心理学的、もしくは生物学的基盤の必要性をグライスが想定していたということがわかった。単に意味の働きを見るだけで十分なのではなく、人間一般に備わった理性という能力の働きをもとにしてはじめて、意味という現象は正当に扱われるのだ。多くの言語哲学的な研究は、そうした基盤を顧みずに言語の働きそのものを対象としている。それに対してグライスは、言語を含むより大きな概念である意味というものを対象とし、さらにそれを可能にする基盤を探っている。こうしたグライスの理論は、言語哲学者が忘れがちなマクロな視点を提供し、現代の言語研究の基礎を築くような力を、今日でも持ちうるように思われる。

註

* nyt.miki@gmail.com

- (1) とりわけこの場合は、「but」のような語がそれ自体で持つ非真理条件的な意味（「規約の含み (conventional implicature)」）と区別して、「会話の含み (conversational implicature)」と呼ばれるが、本稿では規約の含みについては扱わない。本稿で「含み」と言われているのはすべて会話の含みだと思ってほしい。
- (2) 実際にはさらに細かな分類もなされている。詳しくは Grice (1969) を参照のこと。
- (3) わかりやすさのために表記上の修正を加えたが、内容はもともとの定義と変わらない。
- (4) 詳しい内容については Grice (1969)、及び Avramides (1989) を参照のこと。
- (5) Grice (1968) では細かな展開のステップは述べられていないが、すでに論じてきたことから、これがグライスの念頭にあったステップであることは確かだ。
- (6) 手続きという概念の明確な定義は与えられていない。ただ、ふたつの異なる発話タイプが同じことを意味する場合や、ひとつの発話タイプが二種類のことを意味する場合というものを許容しうるようなものとして、この概念は持ちだされている (Grice, 1968, p. 126)。
- (7) しばしば特権的に扱われる言語の意味というものも、グライスにとってはこうした無時間的意味の一部でしかない。
- (8) 「C が A することを欲するならば」という条件をグライスは与えていない。だが Grice (1982) の議論から言い落としと判断し、補うことにした。
- (9) 「理由を与えようとする」というのは、話者の意図への隠れた言及になり、結果的にグライスの理論は循環しているとの印象を与えるかもしれない。だが実際の分析において、グライスはもっぱら「so」や「then」などの出現という発話のかなり形式的な側面に着目しているように見える。この点を強く捉えたなら、上のような印象を晴らすことができよう。このことについては、田村早苗氏のコメントが大いに示唆的だった。氏に感謝する。

文献

- Avramides, A. (1989). *Meaning and Mind: An Examination of Gricean Account of Language*, Cambridge: MIT Press.
- Grice, P. (1957). 'Meaning,' in Grice (1989), (pp. 213-23).
- (1958). 'Postwar Oxford Philosophy,' in Grice (1989), (pp. 171-80).
- (1967). 'Some Models for Implicature,' in Grice (1989), (pp. 138-43).
- (1968). 'Utterer's Meaning, Sentence-Meaning, and Word-Meaning,' in Grice (1989), (pp. 117-37).
- (1969). 'Utterer's Meaning and Intentions,' in Grice (1989), (pp. 86-116).
- (1975). 'Logic and Conversation,' in Grice (1989), (pp. 22-40).
- (1978). 'Further Notes on Logic and Conversation,' in Grice (1989), (pp. 41-57).
- (1982). 'Meaning Revisited,' in Grice (1989), (pp. 283-303).
- (1987a). 'Conceptual Analysis and the Province of Philosophy,' in Grice (1989), (pp. 181-5).
- (1987b). 'Retrospective Epilogue,' in Grice (1989), (pp. 339-85).
- (1989). *Studies in the Way of Words*, Cambridge: Harvard University Press, (清塚邦彦訳, 『論理と会話』, 勁草書房, 1998年)。
- (2001). *Aspects of Reason*, Oxford: Clarendon Press.

[京都大学大学院修士課程・哲学]